

近畿北陸歯科医学大会 2019

口腔癌の早期発見と治療の進歩

奈良県立医科大学 口腔外科学講座

教授 桐田 忠昭

わが国における口腔癌の発生頻度は決して高いものではなく、癌全体の 2%前後を占めるにすぎないが、その 5 年相対生存率は男性 57.3%、女性 66.8%(2006～2008 年)と年々改善が見られるものの十分な治療成績が得られているとは言えない。特に進行癌においては、未だ多くの問題が残されており、早期発見が非常に重要となる。口腔顎顔面領域は、咀嚼や嚥下、呼吸、構音などの基本的な機能を担うとともに整容面でもその個人の identity に大きく影響する重要な器官である。また、全身の QOL にも直結する部分であり、その果たす役割は大きく、この部分に生じた悪性腫瘍には様々な点を考慮した治療がなされるべきであることは言うまでもない。

口腔癌は基本的に化学療法や放射線療法に対する感受性が相対的に高くはな

いため、治療の基本は手術となる。しかし、早期例であれば放射線療法による手術回避も可能であり、また手術が選択されても切除範囲も限定的であり、機能障害もほとんど残らず高い治療成績も得られている。日常臨床においての早期発見のポイントは、病変の色調、表面性状などの視診所見と触診による硬結の有無が最も重要となる。しかし、進行症例においては、様々な臨床所見が加わり、疼痛や出血、機能障害などの様々な自覚症状も見られるようになってくる。進行症例においても、やはり手術療法が主体となるが、最近では様々な再建方法の開発と術後の歯科インプラントが保険適応になったことにより、咬合再建もより患者さんへの負担が少ない形で可能となり、整容と機能の両面の回復も得られるようになってきた。また、新しい化学療法の開発や放射線療法との併用により、治療成績も向上が見られてきている。さらに最近では免疫チェックポイント阻害薬であるニボルマブを代表する、いわゆる免疫療法も徐々にその効果についての報告が見られるようになり期待されつつある。

本講演では、最近の口腔癌治療の進歩と早期発見の重要性についてお示しさせていただきます。